

## 『ファウスト』第一部

### — 神学的考察 —

### 三 枝 禮 三

#### 序 言

1. 成立と骨子
2. 創作方法または人物像
3. 神学的考察

#### 結 語

#### 序 言

「ファウストは、まったく常識では測り得ない作品だ。悟性で理解しようとする試みはすべて徒労に終わってしまう。また、第一部は個性のはっきりしない状態から生まれたことも考えねばならない。だが、このはっきりしない点こそまさに人を惹きつける魅力なのだ。そして人びとは不可能の鍵をとくように、このはっきりしない点をとときあかそうと苦労しているのだ」<sup>1</sup>

これは、ゲーテ自身がエッカーマンに語った言葉である。その言葉どおり「このはっきりしない点」(dieses Dunkel)に惹きつけられた夥しい人びとが、不可能の鍵をとくように、それをときあかそうと苦労してきた。夥しい研究者たちによるファウスト論とその注解は、今や微に入り細に涉っていて、もはやそのはっきりしない点も、ときあかし尽くされた観がある。しかし、そうなればなつたでまた、夥しい文献の密林中に迷い込んで、研究の方向さえ見定め難いというのが実情らしい<sup>2</sup>。素人の門外漢としては敬して近寄らないのが賢明というものだろう。だが、当たり前の話だが、文学作品としての『ファウス

ト』は、新渡戸稲造の言うとおり、学者研究者のみならず万人に対してひらかれ、万人を讀者として招いているはずである<sup>3</sup>。Inselのポケット版の表紙に掲げられているゲーテの言葉どおりでもある。「彼らはやって来ては、いかなる思想を私が『ファウスト』に具現しようとしたかを尋ねる。あたかも私がそれを知悉して語り得るかのように！天上から地上を経て地獄へ—これもいくらかは重要かも知れない。だが、それは思想ではなく、事件の進行なのである」(Da kommen sie und fragen, welche Idee ich in meinem Faust 《 zu verkörpern gesucht. Als ob ich das selber wüßte und aussprechen könnte! Von Himmel durch die Welt zur Hölle—das wäre zur Not etwas ; aber das ist keine Idee, sondern Gang der Handlung)<sup>4</sup>。

もし『ファウスト』の世界が、思想の展開でなく事件の進行だとすれば、悟性による理解の試みは徒労を喫するとしても、素人の門外漢が素朴な一読者として参入することは、ゆるされているであろう。

それにしては、よりによって「神学的考察」などと、恐れげも知らぬ場違いな標題を掲げるとは何事であるか。しかし、それはほかでもない。周知のとおり、民間伝説上は“Doktor der Theologie”として神学を専門にしてきたファウストが、「夜」の書齋の場冒頭で唾棄してみせた所謂「あらずもがなの神学」(auch leider Theologie)を踏ま

えてのこれは、あらずもがなの諧謔のつもり  
のほかには他意はない。

もちろん、ゲーテ自身が『ファウスト』の  
導入部にヨブ記を利用したことを認めている  
以上<sup>5</sup>、古来、多くの人びとが『ファウスト』  
を神義論 (Theodizee) 的作品として、これ  
に神学的解釈を加えたがった訳も顔けないこ  
とではない<sup>6</sup>。しかし、ゲーテがいくらヨブ  
記を利用しようと、伝説上の神学博士に取材  
しようと、完成された作品世界は、それ自身  
として独立した世界であって、もはや採られ  
た題材の出自やそれにまつわるいかなる思想  
とも、ほとんど関係がないと見るべきであろ  
う。

1. Goethes Werke Artemis Verlag Bd.24,S.10  
43. Weimar den 17. März 1832. An Wilhelm  
von Humboldt. この手紙はゲーテ死去の五日  
前に書かれた。(星野慎一「『ファウスト』の構想  
について」《ゲーテ年鑑10所収》P.122及び130よ  
り引用)
2. 徳沢得二『ゲーテ「ファウスト」論考』P.1
3. 新渡戸稲造、ファウスト物語、著作集9巻、P.  
26
4. Eckermann, Gespräche mit Goeth. 6 Mai  
1827
5. 徳沢得二, Op.cit.,P.3
6. ibid., P.4~9
7. 徳沢得二「形成期におけるゲーテとその周辺」  
(ゲーテ年鑑10所収). P.57 f.

ゲーテは、明らかにヘルダーとその夫人の  
カロリーネ等をモデルにしたと目された「神父  
ブライ」(Pater Brey) についてさえ、当  
のカロリーネからの問いに対して、モデル小  
説と解釈してはならないと答えている。すな  
わち、作者は題材に活気と真実味を与えるた  
めに、ただ必要だけのものをある個人から取  
るのであり、後のものは、自分自身で生きた  
現実の印象から取り出すのだと<sup>7</sup>。

この作品と素材との混同をゆるさない画然

たる関係は、『ファウスト』の場合、いよいよ  
妥当しているものとして、見過たないよう  
にすべきであろう。従って、素材の一片にま  
つわる神義論などという神学思想によって  
『ファウスト』の作品世界を裁断してはなら  
ないだろう。むしろ、作品そのものに即して  
読みつつ、ゲーテの天才によって調理しつく  
された素材の組み合わせが醸し出す作品世界  
そのものの豊饒さとその感動を味わうべきで  
であろう。

## 1. 成立と骨子

“Insel” のポケット版『ファウスト』の  
あとがきを書いている J. Göres を始め研究  
者たちによれば、所謂「ファウスト初稿」  
(Urfaust) が書かれたのは、1775年以前、『若  
きヴェルテルの悩み』(1774) の直後だった  
ろうと言われている。ゲーテ、25才前後のこ  
とである。これは、1775年に客となったワイ  
マールの宮廷で朗読されて喝采を博したが、  
切った張ったのあげく、結局廃棄された。ゲー  
テ作品集の最終巻に間に合わせるために改作  
された「断片」(Fragment) が1790年。現  
在の形の『ファウスト』第一部が完成された  
のは、1806年、57才になってからである。さ  
らに、第二部の完成は、1831年、ゲーテの死  
の前年、82才の時で、初稿執筆からだ、ほ  
ぼ60年後のことである。

第二部までの全体の計画がすでにできてい  
たと言われるゲーテでさえも、その中絶から  
再度の事業の完成までには、じつに25年を待  
たなければならなかった、それほどのギャッ  
プと飛躍が第一部と第二部の間にはある<sup>8</sup>。  
ゲーテ自身、1815年8月3日、ボアスレーに  
「第一部はグレートヒェンの死で終わってい  
るが、こんどは、最初の構想を捨てて、もう  
一度やり直す以外に方法がない。それは、ほ

んとにむつかしい仕事だ。画家が、手や筆を取りかえるようなものだ。いま表現したいと考えている世界は、以前書いたものとはうまく合わないだろう<sup>9</sup>と語っているとおりである。われわれは、まずより近い第一部の世界に自らを限定せざるを得ない。

さて、第一部は、あらましなど余計なほど、物語としてはシンプルで、よく知られているところである。じっさい、分かりきった悲劇の粗筋など追うことは、学者研究者には無駄なことちがいない。だが、それを承知でなお、話を運ぶ便宜上、略述すれば、以下のような物語である。

あらずもがなの神学に至るまであらゆる学問を研究しつくしながら、満たされることを知らない、激しい欲求に衝き動かされる老ファウスト博士は、空しい学問的知識の探求をかなぐり捨てて、経験をとおして大小両宇宙の根源的真理をつかみとるため、思い切った行為行動に身を投じようとする。ために、その力を借りようと地霊を呼び出すが、身の程を知れとつっぱねられ絶望して毒盃を仰ごうとする。が、折から起こったイースターの鐘の音と天使らのコーラスの声に思い止まり、野遊びに出る。その帰りについて来たむく犬は、天上で神と賭けをしてファウストを誘惑するためにやって来た悪魔メフィストーフェレスであった。ファウストは、メフィストが彼の下僕として仕える代わりに、もし彼の側で瞬間に対して「留まれ、お前はいかにも美しい」といったら、喜んで滅びようと賭けを交わして同行の旅に出る。しかし、学生たちが乱痴気騒ぎする酒場でも楽しまないファウストにメフィストは、魔女の薬を飲ませて若返らせる。お陰で、ゆきずりの教会帰りの娘マルガレーテを見初めたファウストは、さっそくメフィストに取り持ちを言いつける。メフィストは、宝石や隣家のマルテを

利用して二人の仲を取り持つと、ついにはマルガレーテの母親用の眠り薬まで与えて密会を重ねさせる。その薬のために母親は死に、密通の噂に怒った兄ヴァレンティンは、ファウストを殺そうとして返り討ちに遭う。ファウストは、マルガレーテとグレートヒェンを捨てて出奔すると、メフィストの案内でワルプルギスの夜の魔女たちとの快楽にうつつをぬかす。しかし、一緒に踊っていた美しい魔女の口から飛び出した赤い鼠にびっくりさせられて我に返ったファウストは、首筋に細い一本の赤い紐をめぐらして鎖につながれているらしいグレートヒェンの幻影を見る。メフィストを強いて案内させて急行してみると、牢にはグレートヘンが、赤ん坊を池に捨て発狂しながら囚われの身となって斬首の刑を待っていた。グレートヒェンを救い出すために力づくで破牢しようとするファウストの手をグレートヒェンは、「力づくはいや」と拒絶して神の裁きに服するが、メフィストに促されて彼と共に去って行くファウストの名を呼びつづける。そのマルガレーテに、メフィストは「女は裁かれた」と断罪するが、天上からは直ちに「救われた」という声が響く。

8. 星野慎一「『ファウスト』の構想について」P.

89

9. *ibid.*, P.91より引用

## 2. 創作方法または人物像

J. Göres の後書きによれば、「ファウスト初稿」(Urfaust) に欠けていて、後に書き加えられた主な部分は、以下のとおりである。

まず、巻頭の「献辞」「舞台前曲」「天上の序曲」は言うまでもないが、本幕に入っても、「夜」の場の自殺意図を含むファウストの二つ目の長いモノローグ、「市門の前」(全)、「書

齋」の場でのメフィストの紹介と彼との契約（代わりに、「ファウスト初稿」では、メフィストと学生のやりとりが70節もより詳細になっている）、さらに「魔女の厨」、「森林と洞窟」、ヴァレンティン筋の大部分（二つ目の「夜」の場）、最後に「ワルプルギスの夜」などである。

以上は後から補完された主な場であるが、このほか、場の内部でも多くの詩句が他の場所に移されたり、表現に磨きが掛けられたり、グレートヘン筋では散文だった「牢獄」場面が韻文に変えられたりしている。特に、例えば幕切れのマルガレーテに対する「救われた」という天上の声は、初稿にはなかったものが、後年ゲーテが熟考の末に書き加えた一句であると言われる<sup>10</sup>。

上述のような「初稿」「断片」「現行版」間のテキストの異同は微細な点に至るまで比較研究し尽くされているが、われわれとしては先に触れた概報に基づいて、さしあたり素材の調理の仕方、すなわち、創作方法または人物像に係わる事柄をごくおおざっぱに考察することで満足しなければならない。

《その1》 題材を元型的素材に採ったこと。菊池寛は、素材のいかんによって作品の成否はほとんど決まると言った。まさかそれほどことはないにしても、『ファウスト』の場合、古来からの民間伝承として、その民話的素材が普遍的元型性を備えていたことは、この作品の成否を決めた諸要素の一つとして留意されてもよいかも知れない。あるいは、むしろ、ゲーテの天才による素材の調理は、その素材の選択からすでに始まっていたというべきであろうか。

《その2》 「舞台前曲」における座長と詩人と道化役の三者による制作意図をめぐる議論。これは、そのまま『ファウスト』の創作方法をめぐるゲーテの内なる葛藤と苦悶を

示すとともに、予め仕込まれた弁明であろう。例えば、芸術的永遠性と通俗的今日性、詩的純粋性と趣向の大衆性との葛藤等々。しかも、この作品で取り組まれる世界は「造化の全領域」、天国から現世を通過して地獄に至る全世界、全宇宙であることが予告される。それでいて、お笑いを落としてはいけないと周到に但し書きされているところなど、さすがと言うほかない。

《その3》 メフィストーフェレスの導入ほか人物像の深化。

(a) メフィストーフェレスは、もとより民衆本以来おなじみのキャラクターで、ファウストとの契約場面も既にクライマックスのひとつまでであったと言うから、ゲーテの発明ではない。すなわち、民衆本以来の型に従えば、メフィストはファウストに富と快楽と魔法の力を約束し、24年間仕えることをファウストの魂を担保として契約することになっていた。しかし、ゲーテのファウストは「魂」を譲り渡すのではなく、自己満足して停滞に陥る場合を条件とし、「契約」を結ぶのではなく、「賭け」をぶつ(Die Wette bietet Ich ! )。「そら、シャジャンのシャンときた！」(Und Schlag auf Schlag ! )<sup>11</sup>。ここには確かに中世的世界のしがらみを突き破って自己投企していく自律的な近代的人間の出現が見られる。

(b) ファウスト像は、特に第二のモノローグと「森林と洞窟」において深化が見られる。すなわち、ファウストは、まずモノローグでは、呼び出した地霊によって否定され、虫けら同然だという自棄に陥り、自殺を企図する。が、このときはまだ、その企図をもまたぞろ反逆と地獄を究めるための英雄的行為と化そうとする。だがさらに、マルガレーテを獲得した得意の直後の「森林と洞窟」における省察では、ファウスト自身とその賜物の凡てを

卑しめ否定するメフィストーフェレスによって、かえって今や自身に無くて済まされぬ道連れのごとくに自己内部に食い込まれてしまっていることを認めざるを得ない。ここには明らかに否定性の深化が見られる。人物像の深化は、否定性の深化による。

(c) マルガレーテ (グレートヒェン) の場合。ゲーテは、彼女については意外なほど描写を惜しんでいる<sup>12</sup>。彼女自身、至って寡黙である。だから取り立てて言うことはないくらいである。そのマルガレーテが「庭園」の場で、初めて会ったファウストに珍しく長々と話して聞かせる物語り、「小さかった妹」を母親代わりになって育てた物語りは、やや不自然に響くが、後に嬰兒を池に捨てるグレートヒェンの狂気を非情性から救うための伏線であろうか。グレートヒェンが糸車に向かってうたう所謂「糸車の歌」の第9節「わがむねは、ひたすらに／かのきみに、したいよる」(Mein Busen drängt/Sich nach ihm hin)の“Mein Busen”「わがむね」は、初稿では“Mein Schoß”「わが子宮」となっていたところを後年やわらげたものだとされる<sup>13</sup>。25才のゲーテの熱情が要求した過剰な表現が57才のゲーテの成熟した芸術的意識によって濾過された痕跡であろうか。そのほか、グレートヒェンのために後年、特に書き加えられた「天上からの声」があるが、これはむしろ作品全体の解釈にかかわる問題として、次節での考察に回したい。

13. 越塚信行『ファウスト第一部—解説と注釈—』では、「乙女の内に燃える憧れの念の純なひたむきさ」を示すとしている(P.131)。小塩節『ファウスト』では、もっと激しい表現としての「わたしの腰」であるとしている(P.130)。

### 3. 神学的考察

『ファウスト』に関する著作は夥しい数にのぼっていて、専門の研究者ですら殆ど見通しがつかないほどだと言われている。従って、われわれになお何か新しく付け加え得るものなど今更あろうはずがない。しかしまた、だからこそ、われわれは安心してわれわれ自身の立場から見える部分を考察すればよいということになる。すなわち、序言において肝に銘じておいたところを再確認した上でのことではあるが、福音の光の下で読むことである。それはまた、やはりどうしても、ファウストの所謂「あらずもがなの神学」(鷗外訳)の光を当てて見ることになる。

じっさい、メフィストーフェレスは職掌柄いうまでもないが、ファウストにしても、自ら「いまいまでも神学までも」(auch leider Theologie) 究めつくしたと言うごとく、実によく神学的な問題に通じている。おまけに、純な小娘のマルガレーテまでが、せっかくの逢う瀬を楽しむ代わりに、ファウストの信仰を鋭く問い詰めているとあっては、神学はなかなか言われているほどに「要らんこと」(leider)ではなさそうである。

例えば、メフィストが学生相手の講義の中で述べる言葉の効用についての台詞、「言葉だけで、立派に信仰を示すこともできる／しかし言葉からは、一点一画も奪うわけにはいかない」(2000行)の「一点一画」は“Jota”(ギリシャ語の“ι”)であって、キリストの神性が立ちもし倒れもする“ι”、一字をめぐって展開されたニカイア会議の論争(325

10. 星野慎一, Op.cit., P.116 f.

特に、小塩節『ファウスト』P.168, 「後年、熱慮のすえこの一言を加えたもの」。

11. 高橋義孝『ファウスト集注』P.78「最初に Mephisto が差し出した右手を Faust が右手で握り、次に Faust が差し出す左手を Mephisto が左手で握る。つまり両手を握り合う」。

12. 小塩節『ファウスト』, P.126

年)とニカイア信条とを踏まえていることは明らかである<sup>14</sup>。また、メフィストが洞窟でのファウストの省察をからかって、「気高い直感というやつを」一種の身振りをして見せて「こんなことして結びをつけるんでしょう」とやる場所は、大衆のお笑いを取りながらも、一方では、同時代の神学者、F. シュライエルマッハー (1768~1834) が、直感による啓示受容と男女抱擁の性的エクスタシーを結合した「宗教論」<sup>15</sup>をからかっているのである。ファウストが断言的に表明する「感情こそすべてだ」(Gefühl ist alles)<sup>16</sup>という主張も、近くは、理性の時代18世紀の啓蒙主義を乗り越えようとしたシュトルム・ウント・ドゥランク、さらには、ローマン主義の合言葉だが、より深く大きく見るなら、それはルター後、信条主義に陥った正統主義の瀕死の伝統を打破ろうとした起死回生の神学的ライトモチーフであって、J. G. ヘルダー (1774~1803) からのみならず、むしろシュライエルマッハーから発信されていた神学思潮の主調音だったのである。ことほどさように余計なはずの神学も、良かれ悪しかれこれではなかなか「要らんことに」はなれないのである。

#### 《その1》 ファウストの性格規定とその運命

ゲーテは、ルターの最大の弟子をもって自ら任じていたという。しかし、「酒場」の歌では、太った太鼓腹の鼠をルッター博士になぞらえ (Als wie der Dr. Luther)、ファウストの本質については、「福音はおれにも聞こえる、しかしおれには信仰がない」(Die Botschaft hör ich wohl, allein mir fehlt der Glaube) と、ファウスト自身に表白させている (765)。これは勿論、ルター訳のロマ書3章28節「律法の業なしに、ただ信仰のみによって」(ohne des Gesetzes Werke,

allein durch den Glauben) 義とされるというルターの所謂“SOLA FIDE”の主張を踏まえ且つ逆らいつつ、「ただ信仰だけはないんだ」と開き直っているのである。このファウストの表白は、信条主義に陥った保守的な正統主義の信仰理解に対する批判として必然的であるが、ファウストが更に神の言と信仰の代わりに“TAT”(行為)を置き換えるとき (Und schreibe getrost: Im Anfang war die TAT!), ファウストは謀反人に似た独自の強い性格を帯びて来る<sup>17</sup>。かくて、ファウストは、自己満足と無為の安逸を拒否して、不断の行為と体験の世界へと旅立つ。すなわちファウストは、愛欲に燃える魂と、崇高な先人たちの霊界を憧れる魂との、両者の分裂に悩まされながらも、「自分の自我をば人類の自我にまで拡大し」(1774)、ついには「自由な土地に自由な民と共に住みたい」(第2部; 11580行)と憧れるのである。

#### 《その2》 メフィストーフェレスの本質規定とその仕事

メフィストーフェレスは、まず自らの正体を「常に悪を欲して、しかも常に善を成す、あの力の一部です」と自白する。これはとりあえず、一元論の世界を前提とした存在の自己規定だと言ってよいだろう。その上でしかし彼は自ら「私は常に否定するところの靈なんです (Ich bin der Geist, der stets verneint!)」(1338)と、はっきり自己の本質規定をしてみせる。「そこであなた方が罪だとか破壊だとか、要するに悪と呼んでおられるものは、すべて私の本来の領分(Element)なんです」というわけである。要するに、混沌、闇、無への意志。創造の業に対する「否定の元素」、「否定の意志」なのである。

メフィストが人間を誘惑するために用いる常套手段は、学生に書き与えた「叔母」直伝の台詞、「汝ら神の如くなりて善悪を知るに

至らん(Eritis sicut Deus, scientes Bonum et Malum)」(2048)が、その極めつきの黄金律のはずである。ところが、ファウストに対しては、神の如く全知全能になるというその約束をあからさまには提示しない。それどころか、むしろ「この大きなご馳走は、ただ神というやつのために作ってあるんですよ」(1781)と、もったいをつけている。それは、すでにファウストの方から「全人類に課せられたものを、私は自分の内にある自我でもって味わおう、自分の精神でもって最高最深のものを取ってつかみ、人類の幸福をも悲哀をもこの胸に積みかさね、こうして自分の自我をば人類の自我にまで拡大し」人類と運命を共にしたい(1770)などと、神にしかこなせないご馳走に食いついてきてしまっていたからだろう。メフィストとしては、全智(allwissend)ならぬかなりの智と、全能(alles Macht)ならぬかなりの力とを提供する下僕となって、ファウストを人生体験とやらの旅へ「そろりと」(sacht)<sup>18</sup>おびき出すだけでよいわけである。すると、ファウストは、さっそく「それでも私はやってみる(Allein ich will!)」(1785)と反発して、神だけのご馳走に挑戦する。そして、「神を気どって大きくふくれあがり」(3285)はするが、結局欲望の虜となって、メフィストに「どんなもんだ、もうつかまえたぞ」と得意がられる。のみならず、「あんたの普段ときたひにはもう、ほとんど悪魔同然だ(Du bist doch sonst so ziemlich eingeteufelt)」(3371)とまで折り紙を付けられるに至り、メフィストのもくろみどおり、ファウストの魂は、ついにその根源(seinem Urquell)から奪い去られてメフィストのものとなるはずであった。

《その3》 マルガレーテの問いとその答え

マルガレーテは、「マルテの庭」でのせっかくの逢う瀬にファウストの信仰を問いたがす。メフィストがからかって言うとおりの「大先生様が教理試問された(Herr Doktor wurden da katechisiert)」(3523)わけである。するとファウストは、さっそくシュライエルマッハー流の絶対依存の感情という流行の説を持ち出して、煙に巻こうとする。ところが、マルガレーテは、「だってあなたはキリスト教を信じていらっしやらないんだもの」(3468)と、その不信仰を見抜いてしまう。

ファウストは、ロゴスを「言葉」ではなく「行為」と訳したように、信仰を「信条」ではなく絶対依存の「感情」としたのである。感情と意志と行為と並べたら、それはもうファウストにとってのすべてであろう。もしそれを信仰と呼びたければそう呼ぶがいいし、キリスト教と呼びたければそう呼ぶがいい、というわけである。だから、グレートヒェンの幻影に我に返ったファウストは、「ワルプルギスの夜」のブロッケン山から「牢獄」へと急行し、破獄してでも力づくでグレートヒェンを救出しようとする。ところが、マルガレーテは「放してください。わたし、力づくはいやです(Lass mich! Nein, ich leide keine Gewalt!)」(4576)と、狂いながらもそのファウストを拒否する。しかも、またもやメフィストにせかさされ誘われるまま去って行くファウストの運命を恐れ憂えて、その名を呼びつづけずにはいられない。

このマルガレーテは、ファウストの追及してきた行為による人間の自己救済に対する拒否ではないか。同時にそれはまた、碎かれて神の裁きの下に服するところにこそ救済の道が開かれることを示しているその在り方ではないか<sup>19</sup>。メフィストの「女は、裁かれた」(Sie ist gerichtet!)という託宣につづい

て直ちに「救われた」(Ist gerettet!)という天からの声を最後に敢えて書き加えたゲーテは、そのことを暗示しなかったのではなからうか。それこそゲーテが自らその最大の弟子を以て任じていたルターのメッセージだからである。尤もファウスト自身が、「かつてグレートヒェンと呼ばれた女」もその一人にちがいない「永遠なる女性」(Das Ewig-Weibliche)<sup>20</sup>のとりなしの祈りによって引き上げられるためには、なお第二部の疾風怒濤の旅を経なければならぬのではあるが。

14. 高橋義孝, Op.cit., P. 88
15. Schleiermacher, Fr., Über die Religion, Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern. 1799(R. Otto, 1926<sup>5</sup>). 第二講における「宇宙の直感と感情」は有名。次いで刊行された『信仰論』(Glaubenslehre)において、信仰の本質を表す心情として、「絶対的依存感情」(Schrechthinniges Abhängigkeitsgefühl)という有名なキーワードが提示された。
16. ファウスト, 3456行
17. 小塩節『ファウスト』P. 79、「しかし、ファウストの世界観が聖書とは違う方向に、たった聖書の一句の訳をきっかけにしてもあざやかに示されるわけである」
18. 聖書の古典的箇所では、誘惑は「そろりと」やってくるものである。例えば、エヴァに対する蛇の問いの巧妙さ。また、イエスを裏切ったイスカリオテのユダは、K. パルトが指摘しているとおり、最初は軽く「手渡す」(παράδωμι)ことくらいにしか考えていなかったろうと言われる。
19. これは極めてルター的な福音理解の特徴を示す主張であり、メッセージである。
20. 相良守峰訳『ファウスト』第二部, P. 542注

## 結 語

序言で触れたとおり、『ファウスト』のよくな優れた作品とその素材との関係について再述すれば、独立した作品世界に対して、素材はただ間接的意味をもち得るだけで、けっ

して直接的意味をもち得るものではない。そのことを極言すれば、文学作品として独立した作品世界が形成されていくときの、文学的法則性に対しては、作者自身の信仰や思想すらも、ただ間接的関係をもち得るだけで、直接的関係をもち得るものではない。さらに、完成された作品世界の独立性という点から言えば、作品についての作者自身のいかなる解説的発言も、一批評家のそれ以上の特別な権利を主張し得るものではない。さもなければ、とうてい優れた文学作品とは言い難い。

従って、『ファウスト』という完成度の高い独立した作品世界から、作者ゲーテの信仰や思想に直接的に遡及しようとすることは明らかに誤りであり、探求の方向としても逆であろう。むしろ、ゲーテの信仰や思想のことなどさておいて、まず『ファウスト』という作品世界が究極において語っているところに耳を傾けるとき、その結果としておのずから間接的に、当時のゲーテの信仰あるいは思想も、いささかは窺い知れるかも知れない。

さて、究極の問題として論じられてきた題目に救済の問題がある。すなわち、グレートヒェンは救われたのか。また、ファウストは救われるのかという問題である。しかし、この問題とても、神学的論拠に基づいて論じられるべき神学的事柄としてではなく、飽くまでも文学的方法にかかわる文学的世界の事柄として論じられるべきであろう。そのことを確認したうえでなら、救済の問題は、やはり論じられるべき究極の問題であり得るだろう。文学もまた究極においては、人間の死と再生、滅亡と救済を問題としているからである。ゲーテが、「ファウスト初稿」(Urfaust)の結びになかったあの一句を現行本に書き加えるまでに要した年数と熟慮も、それが果して文学的要請であり得るか否かというその一点の判定のために必要だったからであろう。



この「牢獄」の結びの場面で、破牢までしてグレートヒェンを救出しようとするファウストと、そのファウストを拒むグレートヒェンのからみについての解説として、「彼女の抱く旧世界の信仰は、Faustの救いの手を拒み、裁きを受けることを欲する。ここにGretchen 悲劇の本質がある。新旧両社会の対立抗争が永遠に繰り返されるのであれば、このような悲劇もまた永久に跡を断たないであろう。ここにもこの悲劇の持つ人類文化史上における永遠性すなわち Faust 問題の永遠性が見出されるのである」<sup>21</sup>という説がある。なるほど、そう読める節もないではない。しかし、このいわばクライマックスの場面に、「新旧両社会の対立抗争」という観念を持ち込んだり、グレートヒェンの抱く信仰を「旧世界の信仰」と簡単にきめつけて片付けたりすることは、果して妥当な読み方であろうか。その場合の「新旧」という概念規定は、恐らく牢獄から立ち去っていくゲーテの前に開けていくであろう第二部の世界を新世界として予想し、第一部のグレートヒェンの世界とそれを対比してのことであろう。しかし、第一部の結びに響いていたグレートヒェンの“Heinrich! Heinrich!”という叫びは、やがて再び第二部の終結部では、かつてグレートヒェンと呼ばれた「永遠なる女性」(Das Ewig-Weibliche)のとりなしの祈りとして、ファウストを待ち受けているのである。とすれば、仮に新旧の対立などを持ち出すとしても、それは一時的、相対的な事柄であって、決して永遠の事柄などではあり得ない。かえって、第一部最終場面で見落とされている一層歴然たる対立関係があるとすれば、それは、グレートヒェンとファウストの対立よりも、むしろ二人を中に挟んで奪い合っている天上の主とメフィストーフエレスとの垂直の対立関係、もしくは引っ張り合いであろう。

すなわち、この幕じりで問い詰められているのは、新世界か旧世界かの問題ではなく、滅亡か救済かの問題である。

「ファウスト初稿」(Urfaust)の末尾は、メフィストの「彼女は裁かれた!」(Sie ist gerichtet!)と断罪する台詞と、“Heinrich! Heinrich!”というグレートヒェンの叫びだけで終わっていた。「断片」ではその場面さえカットされた後、1808年刊行の「現行版」において始めて、メフィストによる断罪の直後に、《上からの声》として「救われた!」(Ist gerettet!)の一句が書き加えられたということである<sup>22</sup>。「初稿」末尾の「裁かれた」といういわば結句は、人形劇や民衆劇における幕降ろしの常套句だったという。そのような民衆本における Doktor Faust は、“judicatus es” (“du bist gerichtet”)という台詞で幕となった。時にはこの後さらに、“Fauste, in aeternum damnatus es” (Faust, in Ewigkeit bist du verdammt)とつづくこともあった。ゲーテは、この常套句を利用したのであるという<sup>23</sup>。16世紀末以来行われてきた民衆本においては、この常套句が、勧善懲悪的な通俗的教化の名目を担わされてきた型どおりの極め付けの台詞だったのである。

しかし、シュトルム・ウント・ドゥランク時代のゲーテが、「初稿」を型どおりこの断罪の台詞だけで結んだとき、そこに込められた意図は、決して常套的なものではなかったにちがいない。すなわち、グレートヒェンに対するこの断罪の否定句によって、逆により効果的に、グレートヒェンへの大向こうの同情を喚起するとともに、当時の不自然と規則づくめの因習的な社会規範に対する怒りを込めたものとして読んでも差し支えないだろう。その際、グレートヒェンに対する断罪は、否定的存在でしかないメフィストーフエレス

によるそれであることによって、グレートヘンの決定的な運命は、なお周到に留保されていたわけである。

それにもかかわらず、ゲーテは、「現行版」において熟慮の果てなぜ、《上からの声》として「救われた」(Ist gerettet!)という一句を書き加えなければならなかったのだろうか。それはまず、「初稿」の結びが民衆本の常套的スタイルを踏襲したものとして、どうしても悲劇全体が旧来の通俗教化的枠の中で受け取られる余地を残していたために、その枠を破る必要があったからであろう。さらには、先に触れたような初期ゲーテの主たる動機乃至は意図を越えて、作中の主たる人物の運命が一般読者の関心を強く惹き、しかもそれがただ表面的に「裁かれた」とある文字どおりにしか受け取られない現実に直面して、親切にもそれをわざわざ否定して見せる必要があったからではなかろうか。その結果、確かに旧来の通俗教化的枠だった常套的スタイルは打ち破られたし、メフィストによる断罪も丁寧すぎるほど相対化された。だがしかし、その肝腎な「救われた」(Ist gerettet!)という《上からの声》の一句が、効いているか否かということになると、また別問題である。むしろ、いかに天才ゲーテの熟慮の果ての一句であるとは言え、なお文学的効果という点から言えば、蛇足とは言えないまでも、残念ながら十分な効果をもたらしている必要不可欠な一句とは思われない。

それにもかかわらず、ゲーテが敢えてその一句を書き加えなくてはならなかったところに、『ファウスト』に対する時代を越えたとわれわれ読者の側の無理解が既に見通されて

いたのであろうし、ゲーテの側にも、第二部の完成までの困難さと停滞が予想される中で、そのめでたい終結部を取り合えずこの一句に先取りして示しておきたい思いがあったのではなかろうか。だが、そこまで言うのは、やはり、要らざる深読みということになるのであろうか。

21. 越塚信行, Op.cit., P. 159
22. 星野慎一, Op.cit., P. 116 f.
23. 高橋義孝, Op.cit., P. 13注

### 参考文献

- J.W. GOETH, FAUST, Erster Teil, Zweiter Teil, Insel, 1982<sup>5</sup>
- Jörn Göres, Insel Taschenbuch, Nachwort, S.211~266
- N. Kosizuka, Erläuterungen zu Goethes Faust, Erster Teil, 1976<sup>2</sup>
- 新渡戸稲造, ファウスト物語, 著作集9巻, 1984, 教文館
- 小塩節, ファウスト, ヨーロッパの人間の原型, 1975<sup>2</sup>
- トーマス・マン, ゲーテのファウスト論, 横山靖訳, 1957
- 高橋義孝, ファウスト集注, 1979
- 徳沢得二, ゲーテ「ファウスト」論考, 1968
- 徳沢得二, 形成期におけるゲーテとその周辺, ゲーテ年鑑10所載, 1971
- 星野慎一, 『ファウスト』の構想について——一つの憶測——, ゲーテ年鑑10所載, 1971
- 相良守峰訳, ファウスト, 第一部, 第二部, 1983<sup>6</sup>岩波文庫